

コロナ禍の保育と保育現場の現状：保育を見直す

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 美佐 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4815

コロナ禍の保育と保育現場の現状 —保育を見直す—

児童教育学部 児童教育学科 中山 美佐

要旨：本研究は、コロナ禍での保育の様子を聴き取り調査し、毎日の子どもとのかかわりや、環境の変化、変化によって工夫したことや、改めて考え直したこと、改めて保育を見直したことなどについて考察を行う。具体的には、運動会などの行事や遠足など、「特別な日」をどのように考え直したのか、工夫したのか、また、日々の保育の中で、絶対に必要なものと、そうではなかったものへの気付きについての考察、及び、コロナ禍の保育で保育者たちは何を考え、改めてどのように保育を見直したのかについて考察を行う。今まで当たり前、疑問も抱かずにしていた保育を、根っこから考え直す、見直すことができたのではないだろうか。困ったことや感染症対策で忙しいことが増える中で保育は、保育者にとってとても疲弊することばかりであったと思われるが、子どもを育てることに改めて目を向け、新しい保育を考える機会になったと思われる。コロナ禍の保育が、保育の在り方を見直すきっかけであったとすれば、悪いことばかりではなかったと思う保育者もいることが、今後の保育に、大きな希望があるともいえるだろう。

キーワード：コロナ禍、環境、保育者、行事、子育て支援

1. はじめに

人類の長い歴史の中から、ウィルスとの戦いは少なくはなかった。インフルエンザ感染症は、今では珍しくないものであり、その脅威について多くは語られなくなった。ワクチン接種や感染した場合の薬の処方も今では多くの場合、確立されており、ウィルスと共存しながら生活することがさほど難しくはなくなったと思われる。しかし、「新型コロナウイルス」との戦いはまだまだ続くと思われる。少しずつ解明されていくとも考えられるが、今現在も、未知の部分が多い。このため、保育者は日々、多くのことを考え、できる限りの感染症対策を行い保育している。多くの仕事を担っている保育者は消毒や感染対策にも対応することになった。また、子どもと接することが当たり前のことである保育は、リモートで保育する、ソーシャルディスタンスを保って保育するなど、先ず難しい。保育者は子ども達と心身ともに密に関わる。これは子どもの発達には欠かせないことである。子どもは保育者と手をつなぎ、抱っこされ、一緒に行動し、遊ぶ中で多くのことを吸収していく。このように、ともに行動する中で子ども達は精神的に安定して、生活していくことで成長していくのである。或いは、子ども同士で関わり合い、遊ぶ中でともに学び合い、成長し合う。このことは、保育を行う中ではどうしても欠かせないことであり、コロナ禍での保育の難しさを考えず

にはいられない。また、普段から保育者不足と言われる中でコロナ対策は想像以上に大変であると考えられる。保育現場の不安について掛札(2020)は「あちらこちらで『医療崩壊の瀬戸際』などと言われていますが、私は『保育崩壊』の心配をしています。先生たち、保育士さんだけでなく、園長先生も調理の先生も看護師さんも疲れ切ってしまうのではないかと。比喻ではなく本当に。これまで保育界はいわゆる『待機児童問題』対策に追われ、子育て支援どころか本来は他の福祉部門がすべき活動(虐待対応や保護者の精神保健など)の肩代わりもさせられ、負担増や人で不足はとてつもない状況にあると思います。職場はただでさえ疲弊していると思います」と述べている。また、小田・橋浦(2021)は「現時点において、全ての園が施設の消毒を行っており、半数が日に2回以上行っていた。また、消毒を実施する場所も多岐にわたっており、新型コロナウイルス感染症対策として非常に重要なことではありますが、従来の業務に加え、行わざるを得なかったものであるため、日々の保育者の業務を圧迫している可能性がある」と述べている。このように、保育現場の大変さは容易に想像できる。また、3密(密閉・密集・密接)を避けるように感染症対策が打ち出されているが、保育の現場はこれを守ることが容易ではない。そして実際に、保育者たちはとても疲れていると推察される。コロナウィルスがない時であっ

でも、保育者の仕事内容は、環境整理、清潔維持から始まり、実際の保育、子どもの様子観察、保護者の相談や悩みを聴き、個々の子どもの成長を援助すると多岐にわたっている。保育者不足である上に、コロナ感染症対策をせざるを得ない状況の中で、今、現場ではどのような保育をしているのかを調査し、保育者としてどのようなことを感じたり、考えたり、工夫したりしているのかを調査し、コロナ禍で保育者は保育を改めて考えることがあるかどうかについて考察を行う。

2. 方法

学生の実習先で、今の保育現場の様子の聞き取りを行った。主に今まで行えていたことができなくなった事例や、変更した事例などに着目して聞き取り調査を行った。聞き取り調査を行った園は6園である。聞き取り調査対象者は各園の園長とした。聞き取り調査時期は2020年10月、実習園はすべて保育所である。聞きとった内容はコロナ禍の保育についてであり、特に他のなにかに絞って聞きとるのではなく、自由に話してもらった。

3. 聞き取り内容

A園 運動会がどうしてもご家族で見学されると密になるので、3部制にして、一クラスずつ行った。運動会の歌も歌わず、録音したものを流した。また、音楽に力を入れているので、本来であれば、鍵盤ハーモニカを使用するところだが、ミニ電子ピアノを購入し、鍵盤楽器を変更した。小規模の運動会にした。食事については個々に前を向いて食べている。

B園 様々な活動はクラスごとにするようにして園全体での活動を控えた。お誕生日会なども普段は園全体で行うところであるが、クラスごとに行った。保護者の方も参加くださることもあったが、今年度は参加について見送ることとした。保護者は参加しなかったと思う。今後もこのような対策で園生活を送る中では保護者に対して、YouTubeを使って配信することも考えたが、保育が今までよりも忙しくなり、消毒作業だけでも時間がかかり、なかなかそこまでは手が回らない。できる時が来たら配信をしていきたいと思う。

C園 様々な行事を中止することが多かった。運動会では打楽器を中心に行った。和太鼓中心に行った。今回の新型コロナウイルスで消毒などの衛生面にとっても気を付けることが多くなった。そのためか、いつもはやる

ような病気が、ほとんど流行らなかった。例えば風邪やインフルエンザなどもほとんど流行らなかった。改めて衛生面の大切さを感じた。行事が減ったため、保育者に余裕ができて、ゆったり過ごすことが多かった。

保護者は子どもの様子を見る機会が減ったので寂しいと感じる方も多いと思う。特に、祖父母にとっては何も参加できず、寂しいとの訴えもあった。今後、どのように行事を行うか考えている。食事の時はパーティションを置いている。

D園 子どもの方が大人よりも順応性があると感じた。消毒などもすぐに慣れて、何も言わなくても手指の消毒をするようになった。行事について見直しを行った。運動会については、0歳、1歳、2歳について、今回は運動会をしなかった。このことから再度、果たして0歳児から2歳児にとって運動会は必要なかどうかを考える機会となった。行事と言っても、やはり子どもが主体であること、子どもの発達のために様々な行事を時期なども含め、見直す必要があると考えた。

再度、子どもの育ち、子どもの想いを見つめなおす機会となった。食事についてはパーティションを置き、いつものように食べている。

E園 普段なら4月から入園、進級でバタバタするが、新型コロナウイルスのため、4月から徐々に進めていくことができ、逆に、落ち着いて4月から6月くらいまで園生活を過ごすことができた。子どもたちにとって、ゆっくり園に慣れていくことができたと思う。また、クラスも全員受け入れず、少人数ずつ受け入れたため、先生と子どもも深くかかわることができてそれも良かったのではないと思う。運動会ではいつもは本部を前にして行っていたが、保護者に向かって子どもの立ち位置を考えた。様々な行事で保護者に園には来ていただけなかったので、運動会はしっかり子どもたちの様子を見られるように考えた。また、学年別で行い小規模にして運動会を行うことにより、より、自分の子どもがしっかり見られたと保護者からは喜んでいただいた。お遊戯会については無観客で行い、DVDで子どもさんを見ていただくことにした。DVDについては先生の中にはパソコンに強い先生もいるので、若い先生にとっても助けてもらうことができた。保育についてはまだまだ新米先生であっても、今年度は、逆に教えてもらうこともあった。本当に助かっている。

F園 様々な行事ができない中で心育をじっくりす

ることができたように感じる。近くの公園に遠足に行ったが、近くにも良いところがあることもわかり、いつもはバスで行く遠足も、徒歩遠足でも良いと思った。

今までは遠足と言えばバスでと決まっていたが別の形になった。時間もたっぷり取れて、自然の中で子どもたちが小さな木の机にテーブルクロスを掛けたりして、子どもなりに考えて豊かに過ごしてくれた。行事が減ったが録画して保護者には観てもらい、それでも保護者からは、温かい言葉や感謝の言葉をいただくことができた。

4. 考察

①運動会について

6園からの聞き取り調査で一番多く出てきたものは運動会についてである。実習訪問時期が10月であったためこの内容が直近で悩んだ内容であったと思われる。今まで行ってきた形ではできず、感染症対策を行って運動会をすることに苦慮していたことがわかる。今まで当たり前にできていたことができずに、保育者は悩み、考えた末に、3密を避けるため規模を小さくする、何回にも分散してする、もしくは小さな子どものクラスは今回はやめるなど様々であった。保護者の想いを受け止めると、何人でも見に来て良いと言いたいところではあったであろう。しかし、感染症対策を考えると、保護者にも理解してもらい少数数での見学を理解してもらったようである。具体的には一家につき1名という園や2名(高齢者は入園中止)にするなどの対応としている。ある保護者はそれだけでなくコロナの影響で、普段の子どもの様子を見られないのだから、せめて屋外で行う運動会くらいはみんなで見学したいという要望もあったという。しかし、多くの保護者は理解して協力してくれたとのことである。感染状況を理解し、このような運動会の開催は当たり前と受け止めた保護者の方が多かったと思われる。逆に、大変な中、運動会を行ってくれることに感謝しているといった内容の話をしてくれる保護者も多数いたとのことである。しかし、特に祖父母はかわいい孫の様子を見たかったであろう。気持ちを考えると申し訳ないと思う部分もあったと思うが、コロナによる感染によって命を落とすこともあり、残念ではあるが仕方ないと思い、そこは貫いて伝えることとしたとのことである。

ここで着目する点として、運動会の見直しができたということである。二部制や、三部制にすることにより、保護者からは、子どもをしっかり見ることができた、または、少人数にすることでじっくり子どもを見ることが

できたといった声があったことである。保育者にとっては、入れ替えのたびに消毒をしたり、子どもや保護者の入れ替えがあったり、かなり大変であったと想像するが、逆に保護者にとってはゆったりと自分の子どもを見ることができた機会になったのではないだろうか。園全体で行うダイナミックな運動会も良いが、改めて親子のかかわりや、保護者の望みを聴く機会になったと思われる。

また、0歳から2歳児の運動会について今回は行わなかった保育所もあり、保育者からは、果たしてこの子どもたちの運動会は必要なのかと考える機会となったとのことであり、普段の生活の中で、子どもと触れ合う機会を持つことや、小さな集まりで子どもの様子を見る機会の方が、子どもにも保護者にも良いのではないかと考えたのではないだろうか。0歳児や1歳児は、保育者に抱っこされて、暑い園庭に出ることが、果たして本当に意味があるのか、子どもにとってそれは必要なのかと考える機会となった。むしろ、季節の良いときに一クラスずつ、親子の触れ合いの機会を持つ方が子どもにも、保護者にも良い経験になるのではと考えられるのではないだろうか。子どもに寄り添い、子どもの発達を保護者にもともに味わってもらうことは、今まで実施してきた運動会よりも良いのではと考えることができたのではないだろうか。小さな子どもの今後の運動会については見直すことを改めて考えることができる機会となったと推察される。

行事そのものが子ども主体できていたのかを考えたという園もあり、今までの運動会の在り方そのものについても考える機会となった園もあった。行事と言えば、どうしても保護者に見てもらおうものと、いつの間にか考えてしまい、より見栄えのいいものにと思い、子どもの姿や成長よりも、保護者に見てもらおうための運動会になっていたのではと、思いを馳せる園もあった。再度、運動会の在り方や、子どもを中心として、様々な行事を見直すことも必要ではないかと考えたと考えられる。コロナ禍ではできなかった今までの運動会から保育の原点を考える機会にもなったと思われる。

梅田(2019)は「運動会という行事が、その園においてどのように位置づけられているかがプログラム構成にも表れていることが感じ取れるだろう。運動会の内容にも園の独自性や地域性がある。行事について幼稚園教育要領等では、『生活の自然な流れの中で生活に変化や潤いを与え、子どもが主体的に楽しく活動できるようにすることとそれぞれの行事についてはその教育的価値を十分に検討し、適切なものを精選し、子どもの負担に

ならないようにすること』とされている。それぞれの行事の目的、時期、対象、内容を十分に検討し、精選することが求められている」と述べているように、本来は、コロナ禍でなくてもしっかり考えられなければならないところではあるが、今回は、行事を精選する機会になったと考えられる。

②遠足について

遠足についてもいつものようにできなかったという話もあった。遠足と言えばバスで行くということが普通であったが、バス会社からの断りもあり、また座席を空けて座ると料金がかかりすぎる、数台に分けて乗る保育士がいけないこともある。遠足に行った先でお弁当を食べるところがない（感染症対策で食事を摂ることが許されない）こともあり、かなり困ったとのことであった。子どものためには遠足には行きたいと思い、考えた末に、近くの公園に歩いていくことになったが、これも新たな発見であった。徒歩圏内にこんな公園や広場があるとは気が付かなかったと、改めて近隣の様子を見直すことができたようである。普段では気付くことができなかったことに気付く機会になったと考えられる。地元の良さを改めて感じた、保育の中で、地元の良さを感じられる、経験できる機会となり今後もこんな場所を使っていきたいとの話であった。遠くのバス遠足も良いが、自然に囲まれて、時間もゆったり過ごせたことが良かった。子ども達も、とても喜んで過ごし、お弁当もゆっくり食べることもできたということであり、遠足についても考える機会になったと思われる。勿論、バスに乗っていく遠足も楽しいと思うが、今後の遠足の在り方について考える機会になったことは、保育者にとって、良い学びにつながったと推察する。

③子どもの受け入れ方法

子どもの春からの入園や活動について、4月からはとてもバタバタするが、コロナの影響で、少しずつ受け入れることができた。分散登園でゆったりと子どもとかわることができ、子どもや保育者にとっては、いままで経験したことのない春の活動になったという園もあった。4月から6月くらいまでは園に慣れず泣く子どもも多い。この頃の保育者は大忙しである。しかし、ゆったりと少人数の子どもと深く寄り添うことができ、子どもにとっても保育者にとっても良い機会になったようである。入園当初は、保護者も心配されるが少人数であれば、泣いている子どもに対して丁寧にじっくりかかわることができる。保護者にも、丁寧に説明して寄り添うこ

とも難しくはない。保育者にとっても、子どもにとっても、この部分は良い関係を育むことができたであろう。今後、できることなら、少しずつ受け入れてきていけたら良いと思うが、この辺りは難しいところだと思われる。コロナ禍の保育は決して悪いことばかりではないと思われる。このことから保育者の質とともに、余裕のある保育者の確保は課題であると考察する。

④園での様子の伝え方

コロナ禍では保護者さえ門までしか入れない園もある。感染症対策で仕方がないが、保護者にとっては、わが子が園でどのように過ごしているのか、送迎の場面だけでも保育室の様子を見たいと考えられる。子どもの様子は口頭でしか伝えられず、動画を撮って配信する園もあった。しかし、これは運動会やお誕生日会などの行事の様子のみであった。保育者は、子どもと接して関係を深めていき、子どもの成長や学びを深めることで手いっぱいであり、普段の様子を動画に撮る余裕もないに等しい。また、全員の子どもをまんべんなく映すことも難しい。このようなことから運動会を動画にして、来援できなかった保護者や祖父母に見てもらうように工夫をした園もあり、子どもの様子をどのように伝えようかと苦慮したこともわかる。ここで、新任の保育者はとても重宝された。保育者としては未熟であったとしても、動画を上手に作ってくれたと喜ばれていた。新任保育者がこのような作業を他の保育者の誰よりもよく知っていて助かったとの話もあり、養成校を卒業したばかりの保育者は園に貢献できたという喜びと達成感を感じられて、園にとっても新任保育者にとっても良い経験であったと考えられる。また、この機会をきっかけにして、コロナ禍ではないときに時々動画で保護者に子どもたちの様子を伝えていきたいと考えている園もあった。保護者に向けて新しいツールを使うきっかけになったとも考えられる。

⑤食事時の工夫

食事については、マスクを取る場面であるため、小学校のように全員が前を向いて食べるようにし、できる限り黙食を勧めていたり、パーテーションを置いて、飛沫が飛ばないように工夫したりしている。子どもはおしゃべりしながら、食事を楽しむことが多いため、気にはなりながらも、できるだけ静かにと声をかけることもある。黙食は子どもには向かないと推察しながらも感染症対策で仕方がないと割り切るしかないという園もあった。本来であれば、おいしさや、色や形、今日の出来事、今思っていることを言葉に出しながら食事を楽しん

でしてほしいと思いつつも、できない菌がゆさが保育者にはあると推察する。楽しく食べられるように手作りでパーティーを作っている園もある。



図1 食事風景



図2 手作りパーティー

⑥保育者の想い

多くの保育者は自分がコロナに罹患してはいけないと思いつつも、普段は友人とおしゃべりを楽しんだり、出かけたりしてストレスを発散するが、その気持ちを抑えて、家と保育所の往復のみという生活をしている。園側からお願いをしていることも多い。他の職種と異なり、リモートや遠隔、人との距離を取ってなどが全く無理な仕事であり、また、子どもを預かる仕事であるため、自分の行動に気を付けている。園長は保育者たちが、どのようにストレスを発散できるのか、保育者はストレスを抱えて

いないか、保育者の顔色を見るが多くなったと話し、保育者の方が減入ってしまったのは、子育てに影響が出ることも心配をするという。そう話す園長もまた、ストレスをかかえているであろう。しかし、前向きに考える保育者たちも多く、運動会ができて良かった。遠足に行けて良かったと話す保育者には笑顔があり、「奇跡的にできましたね」といった声もあったとのことである。何よりも、保護者や子どもの想いを受け止めていくことは普段よりも多くなっている。保護者の意見は様々で、全員の想いをかなえてあげることは難しい。個々の家庭で感染に対する想いが違うからである。そのことを理解し、寄り添いながら保育を行うことは、時には辛いとき、苦しいときもあると想像する。それでも笑顔を大切に接する保育者が多く、精一杯、保育をし、子育て支援を行っている。多くの消毒作業や換気、マスクなどに気を遣い、心身ともに疲れていても、少しでもできたことを喜ぶ保育者たちは、どこまでも健やかな子どもの育ちを援助、支援していると思われる。時には保護者から感謝の気持ちを伝えられて心から嬉しいと感じることもあると思われる。

5. 終わりに

コロナ禍での保育は、悩むこと、困ったこと、また、消毒などの仕事があり、明らかに今までよりも保育者は忙しかったであろう。しかし、保育者はそれだけで終わるのではなく、その中からでも、子どものことを考え、保護者の想いを受け止め、決して悪いことばかりではないと考えて、改めて見直し、発見し、より良い保育を目指している。どのような苦境にあっても、保育者としての想いは、いつ、どのような時も同じ姿勢であることがわかる。保育の役割として長瀬(2020)は「この状況の中で、保育の役割や重要性を再認識することになりました。それは、保育が、子どもの生命と心に直に向き合う仕事であるということです。子どもの体調や小さな変化に気を配りつつ、いつも以上に心身の不調、不安に寄り添ってきたことと思います。感染拡大防止のために『三密』を避けることが求められていますが、保育の現場では、三密を避けることはほぼ不可能です。乳幼児を対象としていること、配慮の必要な子どもも多いことから、生活の様々な場面で介助や援助が不可欠であり、『社会的距離』を保てるような場もなければ、職務でもありません。常に感染リスクの高い中で子どもの生命と情緒を守るという重大な使命を持った職務なのです。」と述べている。保育者は子どもの育ちを大切にしながら、必要であれば工夫をして行事を行い、再考察を重

ね今まで行ってきて、実は不要であったかもしれない事柄に気づき、また、子どもにとって何が一番重要なのかを考えあい、協働しながら日々の保育を見つめ続けている。なぜ、このような時にも保育者は頑張れるのかについて、長瀬は「この状況下の中で何をしたらいいのか、どうしたらいいのか悩んだとき、どこに立ち返ったかを思い出してみてください。子どもの発達、発達にふさわしい生活と遊び、『受容や共感』といった『保育の基本』に戻って考えたからこそ、『今できること』を見つけ出すことができたのだと思います」と述べている。このように、保育者は学びを力に、または、学びを基礎にして保育を行っている。もし、学びがなければ簡単に子どもと離れ、簡単にただ黙って保育を行うであろう。しかし、保育者は子どもの心身の成長にとって、何が大切か、何が重要かを学んできている。これは、子どもを育てる保育者にとって何よりも頼りになる力であるだろう。学びが力となり、保育を見直し、よりよい保育を探索し、行動していったと言えるだろう。様々な園の方針があり、様々な特色がある。しかし、底辺には子どもを育てる学びが共通してあるのだと考えられる。今後、まだまだ、感染症対策を講じながら、保育を行うことになるだろう。しかし、保育者はその中で、新たに学び、改めて考えなおし、また、学びながら、子どもたちを育てていくと考察する。

【引用・参考文献】

- 掛札逸美 2020「園と家庭をむすぶ げ・ん・き」179号 p.3
- 小田幹夫, 橋浦孝明 2021「宮城県仙台市における保育現場の型コロナウイルス感染症対策の現状について」羽陽短期大学紀要第11巻第3号 p.45
- 長瀬美子 2020「保育問題研究」新読書社 p.10
- 梅田優子 2019『保育内容総論』萌文書林 p.59
- 前掲「保育問題研究」p13
- 厚生労働省 2018『保育所保育指針解説書』フレーベル
- 文部科学省 2018『幼稚園教育要領解説書』フレーベル
- 内閣府 2018『幼保連携型認定こども園教育保育要領解説書』フレーベル
- 高山静子 2021『環境構成の理論と実践』郁洋舎
- 阿部和子 2020『子ども家庭支援論』萌文書林
- 無藤隆 2018『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』
- 林邦雄 2012『相談援助』一藝社